

オーエン・ハーパーが微笑みながらぼくを見下ろしてる。ぼくは死ぬんだ。

ぼくはポール・タルボットって行って二十七歳。カーディフ生まれで保険会社で働いてる。きっちり 180センチで表と裏を持っている。好きなテレビ番組はバーナビー警部[※1]だけど、周りにはザ・ワイヤー[※2]ということにしてる。髪は赤みがかかったブロンド（赤毛ではない）で、さそり座。そうそう、それから、ぼくは神様を信じないたちだ。

というか、前までは神様を信じてなかった。いまは検死台に横になって、神様でも仏様でも誰でもいいからいてくれたらいいのに、と絶望的な気分で祈ってる。だって、この瞬間、ぼくは本当に震えあがってるから。

「怖くて目を閉じられないよ。閉じたらもう二度と開けることがないかもと思うと。」

「なら、開けとけよ。」オーエンはまだ微笑みながらいった。「死と立ち向かうんだ。」  
彼がそういうのは簡単だ。

その朝、ぼくはちかちかする光と痛みで目覚めた。ソファで寝ていた。スーツを着たままで。まず考えたことは、必要なものを全部持ってるかどうか確認しろだった。ポケットを探る。財布・・・携帯電話・・・鍵・・・たばこ・・・全部持ってるな、よかった、でも、立ち上がろうとするとぼくの周囲の世の中が荒々しくぐるぐるまわって、トイレに走り吐いてしまった。それからぼくはよろめきながら立ち上がり、鏡をのぞきこんだ。鏡に映る姿に恥ずかしくなり、もう二度と職場の連中と飲みに行かないぞと思った。

「おまえも二十七歳になった。」ぼくは鏡に映る自分にいった。「変化が必要なときがきた。」

そして、ぼくは目を閉じ、何をしてたのか、誰と一緒にたのか、何を飲んだのか、どうやって家に帰ってきたのか思いだそうとした・・・土曜日の朝のいつもの質問の儀式。それから、ぼくは思い出せないことに気づいた。はっきりしない。ただ、ちょっと、大ジョッキを数杯そして・・・ん、ウォッカも？他は何も思い出せない。バスタブのふちに座って、少し怖くなって、思い出そうと考えた。オフィスでデイヴが来て、誰か一緒にパブに行こうとிட்ட。ぼくと一緒にிட்டのは明らか。で、まず大を一杯飲んだのは覚えてる・・・で、ぼくは店を出た！間違い無く店を、大を一杯飲んだだけでパブを出て、家に帰った。

それは、一連のあり得ない出来事の始まりにすぎなかった。

それで、ぼくはリビング・ルームの中をよろめきながら、なぜこんなに死にそうなほど気分が悪いのだろう？と不思議に思った。ソファにへたりこみ、思い出そうとした。いままでだって、どうやって家に帰ってきたのだろうと目覚めて戸惑うことがあったけど、今回は違う。これは酒のせいじゃない。これは夜遊びのせいじゃない。これはそういう類の

ものじゃない。パブで大を一杯だけ飲んで、それから・・・

日が暮れる時間だった。道は渋滞してた。覚えていた。ぼくは歩きながら、mp3プレーヤーを聴きながら、片方のイヤピースがうまく耳に収まってくれないのでいらいらしていた。信号待ちで車が停まっている。ぼくが横断歩道を渡るのを待っている車の中で、カップルが言い争いをしている。光が霧のように降り注いだ。道を渡りながら、ニルヴァーナの旧アルバムを聴いていた。ああそうだ、すべてが少し気味悪いけど、パブで大を一杯飲んで出た。しらふで家に向かっていた。金曜日の夜だ！だから機嫌がよかった。と、そのとき、何かがぼくに当たった。

ぼくはソファから立ち上がり、実際、手で口を覆っていたかもしれない。テレビドラマで登場人物がショックを受けてるときにやってるしぐさだよ、わかるよね？何かが間違はなくぼくに当たった。男じゃなくて、人じゃない。急に光が来て、それから・・・**ドン！車の中の連中かも？**いや、違う。覚えてる。彼らは信号で停まったままだった。そいつはどちらかといえばショックみたいなものだった。電気ショックみたいな。

**ドン！**轟音がしてぼくは飛び上がり、フラットメイトが正面玄関から駆け込んできた。クリスは二十五歳で、コンピュータの仕事をしている。ウェブサイトのデザインか何かだと思ったが、得意じゃないので決して聞かないようにしている。今思えば聞いておけばよかった。彼は買い物袋をふたつ下げていて、テーブルの上にどさりと置いた。

「なあ、表はおそろしく暑いぞ！」彼はいった。

彼の服の脇が汗で濡れているのに気づいた。額が汗で光っていた。彼が寄ってくると、汗が匂った。

「大丈夫かい？ソファで倒れてたようだったけど。」

「あ・・・いや。」ぼくはつぶやいた。「いや、大丈夫。」

彼は買い物袋からものを取り出し始めた。卵、パン、ベーコン、オレンジジュース。ぼくはその様子を見つめていたに違いない・・・

「ああ、心配しないで、朝食はぼくが作ってあげるから。だけど、絶対次は作ってよ。」彼はにやにやしながらいった。

彼の声が耳に刺さるようだ。どうなっているのかわからないが、とにかく、声で耳が痛い。そして、餓えていることに気づいた。ただ事ではないほど・・・まあ、まじで二日酔いになったら、できることっていったら、最初二時間位はタバコを吸いまくって、それからやおら食べ物じゃないのか？今すぐ食べなかつたら、体の働きが止まってしまうとなれば、何でも食べられるだろって？まさにそんな感じ。クリスの声が心を切り裂き、食べ物欲しさに胃から胆汁が込み上げてくるのがわかるにつれ、心臓の鼓動がどんどん速くなっていく。いますぐ食べないと耐えられない。

その瞬間、ぼくは食べ物なんか眼中にないということに気づいた。ぼくはクリスを見ていた。汗の匂いを嗅ぎ、彼の血が、ぼくの血が流れる音を聴き、彼に向って駆け寄って、最後に覚えていることといえば、彼がいつもの何が面白いのかさっぱりわからないよ、と

いうときに見せる中途半端な微笑みだった。彼が**ギャビン&ステイシー【※3】**を見てるときのような。

再び目を開けた時、ぼくは混乱していた。カーペットの上に横になっていたし、口の中で何か味がする。オレンジジュースじゃない。手を伸ばすとソファの腕をつかみ、支えるようにしてふらふらと立ちあがった。

「クリス？」ぼくは混乱しながら呼んだ。「ぼく、倒れてたみたいだ・・・いるのかい？」

返事はない。テーブルを見ると、卵、パン、ベーコン、オレンジジュースとクリスの残骸が見えた。

ぼくは後ろによろめき絶叫した。クリスの血が床に滴っていた。テーブルの上からと、ぼくの口からと。ぼくは絶叫し、彼のボディをその残骸を凝視しながら絶叫し続け、わかった。一瞬で明確に自分が何をやったのかがわかった。それでも気分が悪くならないなんて最悪だ。まだ血と汗がゆっくりと喉を流れ、胃の中の胆汁が収まっていく。クリスは美味かった。

しばらくして、叫ぶのを止め、ソファに倒れ込み、カーペットを見下ろした。クリスから目を逸らした。パニックになるのを抑えようとした。深呼吸した。買い物袋をつかみかかった。その中で息をしたかった。でも、買い物袋は髪と血と内臓まみれだ・・・ぼくは深呼吸した。落ち着こうとした。何が起こったのか理解しようとした。論理的に考えようとした。ぼくは何者だ！？自分で考えるだけで笑える・・・ぼくは吸血鬼か？バカな、だって吸血鬼なんかいるわけない。で、咳き込んで吐き出してみたらクリスの歯だったもので、彼の血を飲んだだけじゃないとわかった。それから、笑いだしたら、止まらなくなった。これがぼくなんだ、ポール・タルボットだよ！ぼくは子供のころ、誰かが指を怪我して怪我した本人が傷口を舐めるのを見ただけでいつも震えあがっていた。ぼくはいつだって怖いんだ、もし君が傷口を舐めて、血の味が気に入っても、もっと欲しいと思うかって？でもいまは、そのことを考えてる。とにかく、血は非常に美味しい・・・なんというか温かくて、濃くて・・・まるで・・・まるで濃厚な肉感のある紅茶みたい。ぼくは笑い続けた。そう、興奮してた。ぼくはフラットメイトを襲って、大半を食っちゃった。クリス・マニング。二十五歳。もうコンピュータの仕事はしていない。ぼくは笑い止め、泣き始めた。でも、ぼくはクリスのことで泣いているわけじゃない。誰かを殺したから泣いているわけじゃない。何か恐ろしい理由でフラットメイトを殺して食べてしまったから泣いているわけじゃない。

とてもとても餓えてるから泣いてるんだ。

フラットを飛び出し、建物の出口に向かう階段を降り、途中の踊り場ですすけたガラスに映る自分を見たかのように、足を止めた。もし、自身の姿が見えたら、論理的に言って、ぼくは吸血鬼ではありえない。ああ、飢えて吐き気を催し、絶叫するまでのほんの一瞬だ

けいい気分だったかもしれないと思った。ぼくは通りに走り出た。週末を楽しむ人でいっぱいだ。ぼくには彼らが見えたけど・・・ああ、香りが！限りなく甘い、血と香水とデオドラントの。すべて異なる人々は、異なる香りを持っていて、異なる味がする・・・

ぼくはどこに行って何をすればいいのかわからなかった。病院か？何ていえばいい？気分が悪いってか？それとも、たぶん警察に行って、逮捕されて、牢屋行きになって、できないよ。そいつは・・・飢えが体を引き裂くようで、再び金切り声を上げた。ぼんやりと、人々がぼくを見ているのがわかった。女の子が、七歳位の子が、突然ぼくを見上げ、大丈夫かと聞いてきた。彼女はとても小さくて、ぼくはくらくらした。再び飢えが襲ってきたが、怖くて、意識的に後ろに下がり、彼女に行けと叫んだ。実際、彼女に断言した。でも、自慢できることじゃない。

ぼくは買い物客の間を走り抜けた。ぼくは聖メアリ通りにいた。サイレンとおしゃべりと車の音と笑い声。あらゆる雑音がぼくに襲い掛かり、乱打し、走り出したい気持ちにさせ、すべてを止めさせ、とても餓えた気分にしてくれる。ぼくがどれほど餓えてるか君にはわからないだろう。ぼくは路地を走り、人ごみから離れ、あらゆるものから離れようとした。ぼくは両親のところに行かなければ、と論理的に結論に達した。両親なら助けてくれる。ぼく、何かがおかしいんだっていえば、助けてくれる。

ぼくを守って。

ぼくを救って。

ママはいつだって子供の時助けてくれたし、いまだって助けてくれるはず。ぼくをハグしてくれるはず。大きな心地よいハグで、その香りは・・・ぼくはまた絶叫し、古いナイトクラブの壁に寄り掛かってくず折れた。考えを締め出そうとした。飢えのことを考えないように、ぼくがだれなのかを思い出そうとした。

「あんた、大丈夫かい？」

声が空気を裂き、ぼくは見上げた。女性。ウェイトレス？ナイトクラブから出てきたようだった。彼女は・・・実際、彼女の髪の色は何といえばいいのかわからない。彼女が何歳なのかも。なんにも。だって、見上げてすぐ、すべてが暗闇に包まれてしまったから。

再び目を開けると、お日さまの光が真っ向から射ってきて息を飲んだ。すべてがとても輝いているようだった。ぼくの両手の女性の血ですら、輝いているようだった。ぼくはきれいに指を舐め、路地をよるめきながら進んだ。

**「ずっとそのことを考えているんだな？」 オーエンがたずねる。**

**まばたきで涙を抑えないようにしながら、うなずく。暗闇が恐ろしい。**

**「止めるんだな。」 彼はいう。「不健康だぞ。」**

**ぼくは拘束器具に逆らいながら、弱々しく微笑んだ。**

両親の家にたどりつくのに、どれほどかかっただろうか。両親はグランジタウン郊外に

住んでいて、いま、ぼくは永遠に走れる気分だった。ぼくは野獣だった。思考できない、制止が効かないのだった。ただ食べ物がほしいだけ。ママとパパが助けてくれるだろうという心の片隅にあった希望は、もう消え去った。走ってきたぼくを見て、お隣のモンローさんが何かぼくに質問を始めた。で、ぼくの服についた血に気づいたに違いない。彼女が目を見開いたから。ぼくは進行方向に居た彼女を殴り倒し、ドアに蹴りを入れ、両親の家に押し入った。

「ママ、」ぼくは吼えた。その声に一瞬止まった。だって、自分がやったから。ぼくは本当に咆えたのだから。ぼくの声じゃない。廊下を走りぬける間、並んだ家族写真のガラスに自分の姿がちらりと映って見えた。でも、ぼくの姿じゃなかった。何か別のもの、で、その何かを見つけ出すために止まろうともしなかった。いつもママがいるはずのキッチンに向かって走った。まるで何というか・・・まるでぼくの心が別の次元で動いていて、事実はそこにある、みたいな？土曜日だった。午後二時ごろだった。だからママは買い物に行けば良かったんだ、パパとの遅い昼食を作るため、キッチンにいるなんて。とてもいい天気だから、小さな裏庭に出て食べてる。これらの事実を知っていたのかははっきりとは理解してない・・・そして、とっさに、なぜ今ぼくは両親のことを考えているのか、直ちにわかった。ぼくは獲物のことを考えているのだった。戦術だった。彼らがどこにいるか知ってるからできるのだ・・・ぼくはキッチンのドアを蹴破りながら、再び吼えた。

そして、ぼくは停まった。ママもパパもいなかった。五人の人間が兵士のようにぼくに銃を向けて立っていた。一瞬、ぼくはパニックになった。銃を見るのは初めてだったし、本気でいってるんだけど、銃を向けられるのは気持ちいいもんじゃない。ぼくは頭をかしげ、彼らが銃を向けているのでめそめそと泣いた。ひとりが止めるようにとぼくに叫んだ。

「動くんじゃない！」アメリカ人だった。汗の香りはしない大柄でハンサムな男性だ。彼には汗以上の香りがみなぎっていた。彼はハンターか、獲物か？彼はパワフルだ。味わってみたい。ぼくは再び吼え、彼から目を逸らした。他の者たちを見た。女性がふたり、いい香りだ。そして、男性がひとり・・・匂わない。

**「なぜ、ぼくはあなたを食べたくないんだろ？」 オーエンにたずねた。**

**「おれが死人だからさ。」 彼は答えた。**

**ぼくは理解しようとした。彼が本当にいおうとしていることは何なんだろう、でも、ここへ来た理由しか思い出せない。**

もう手遅れだ。確か五人いたはず。男は三人だった。そのひとりがぼくの後ろにまわりこんで、何かをぼくの顔にスプレーした！ぼくは息が詰まり、ママの新しいキッチンの床に吐いた。彼にパンチを繰り出し、爪をたてて攻撃した。食器棚に突き飛ばすと、彼がぶつかった衝撃で棚の扉が開いた。ぼくは咆えていた。本当に咆えていた。他の連中に焦がれた。何としてでも殺して、食べて、味わって、空腹を満たしたかったが、そのとき・・・

スプレーが効き始めた。すべてが暗闇に包まれていく。最後に聞こえたのは女性の声・・・  
「ジャック・・・教えて。彼を救わなきゃ・・・」  
すべては暗闇の中。

目を開けた時、今度は獲物の残骸がなくて良かったと思う一方、空腹で泣けてきた。狩りをしたい、食べたい、味わいたい。空腹を止めたかった。

ぼくは・・・うーん、いったいどこにいるのか神のみぞ知るところ。広い場所。ほんとに広い場所。石とタイルの壁、何かを支える金属ガントリー、コンピュータや何かもわからないあれこれに、ロアルド・ダール・プラスのウォータータワーみたいなものがある。理解しようと思渡した。もう、ぼくはイスに縛り付けられているとわかっていた。捕まって、餌を食べられないってことか。胃が痛くて引き裂けそうだったので、吼えはじめた。

「何とかできないのか、オーエン？」アメリカ人がたずねた。「叫び続けられるのは勘弁してほしい。」

ぼくは男を、ぼくに近寄ってくる匂わない男の方を振り返った。彼は肩をすくめると、ぼくの腕に針を突きたて、注射した。

「いったいなんだ？何を注射した？」ぼくは叫んだ。

オーエンは後ろに下がった。「麻酔だ。これで何とか痛みが・・・止まってくれば。」体がしびれて解放され、ぼくは泣き始めた。空腹が収まる。

オーエンは戸惑った様子で、引き下がった。アメリカ人が前に出て、視界を遮った。パワーの匂いに圧倒される。

「いろいろ騒ぎを持ち込んでくれたもんだ。」彼はいった。「人をふたり殺しただけでなく、イアントにまで怪我をさせてくれたな。そんなことして許されるのはおれだけだ。」

彼の肩越しに、ママのキッチンで打ちのめした男性がちらっと見えた。顔を真っ赤にしていた。

「ごめんなさい。」ぼくはつぶやいた。それから、アメリカ人を振りかえった。「ぼく、ふたり殺した・・・」

彼はうなずいた。「夕食時でもないのにな。」

ぼくは目をばちくりさせてしまった。彼を見、ゆっくりと目を瞬いたのを覚える。だって、彼の言葉を正しく聞きとったのかどうか、自信がなかったから。ぼくは彼の冷たい目を真っ向からのぞきこんだ。

「それ、おもしろいとでも思うわけ？」ぼくはたずねた。「ジョークのつもりでしょ？」彼は驚いた様子だった。「人を殺したのは君の方だぞ。」

「だって、ぼくはおかしくなってるんだ！止められないんだよ！」ぼくは彼に正面切って叫んだ。

「ジャック、彼と話をさせて。」女性の片方だった。彼女はそっとアメリカ人を、ジャックを脇によらせると、目の前にしゃがみこんだ。彼女はぼくの腕に手を置いた。「わたしはグエン・クーパーよ。あなたの名前はポール・タルボットね？」

ぼくはうなずいた。

「OK、ポール、だれもこのことをおもしろいなんて思っちゃいない。わたしたちはあなたを助けたい。でも、何が起こったのかを知らないと。」

彼女はぼくの間近にいた。彼女のデオドラント、香水の香りが・・・その下には、脱出口を求めて闘う真実の彼女の香りが嗅ぎとれた。ただの動物だ。彼女の血、汗の匂いが漂う・・・舌に感じる・・・必要があるんだ。

「下がって！」ぼくは絶叫した。

彼女はぎりぎりですぐ後ろに倒れた。彼女の首があったちょうどその場所に、ぼくの口が攻撃をかけていた。

「ごめんなさい！ごめんなさい！」ぼくはわめいた。「止められないんだ。」

ジャックは腕を組み、オーエンのほうを見た。「麻酔だって？」

オーエンは首を振った。「すみません、ジャック。でも、今の彼に何ができるのか他に思いつかなくて。彼が何物か知っておかないと。」

「彼は人間よ。」声がした。ぼくはコンピュータの前に座るもうひとりの女性を見上げた。「出生証明書、車の免許証に・・・どこの学校の出身かも突き止めた。彼はポール・タルボット、人間よ。」

ジャックは彼女の方へ行った。「ありがとう、トシ。彼は間違いなくスリーパーエージェントではないんだな？」

彼女は首を振った。「ええ。人間で、変化しつつある。」

「ジャック、いくつかテストをしてみます。彼が何に変わりつつあるのか試し、理解するために。」オーエンだった。

イアントがコーヒーのトレイを持ってきて、仲間に加わった。「本気ですか、オーエン？本気でタンタンのモンスターとふたりきりになりたいと？」

オーエンは振り返ると、彼をぎろっと見た。「何ていった？」彼は静かにたずねた。

イアントはぼくの髪の毛を指さした。

オーエンはため息をつこうとしているように見えたが、突然、イアントに向かって叫び始めた。「こいつはびっくりショウではない！」

オーエンが叫び続けるので、ぼくはショック受け、見つめた。彼は銃撃や死や飢えについてわめきつづけた。トシという女性が彼のそばに来ていて、彼を押さえ、なだめていた。イアントはぼくと同じで、ドクターの怒りを恐れ、ただ見つめるだけだった。ジャックとグエンがやめるようにとオーエンに訴えかけていた。雑音で切り裂かれそう。目を閉じて、音を閉めだそうとした。ほおに熱い涙を流しながら、吼える自分の声が聞こえた。そのとき、雑音に耐えられないわけではないことに気づいた。飢え、限りなくいまましい飢え

だ。ぼくは餓えて泣いた。そして、すべてが暗闇に包まれた。

「どうしてあんなに怒ったの？」オーエンにたずねた。

「だって、」彼は答えた。「君に何か起こるとき、おれにはどんな気持ちかわかるからさ。自分が変わっていく時、人生が一瞬で奪われていく時、どんな気がするかわかるから。」

「もう終わり？」

オーエンは首を振った。「君はおれが失ったものをまだ全部持ってる。」

ぼくは目を開け、頭を持ち上げた。トシはコンピュータの前に戻っていた。グエンはソファに座り、ジャックはその隣に座っていた。イアントが向こうの壁の薄暗がりの中に立っているのが見えた。

「オーエンはどこ？」ぼくはたずねた。

ぼくが男の名前をいったので、ジャックは驚いた様子だった。「彼は別の場所に行ってる。君に起こったことを治療する方法に取り組んでいる。」

グエンはジャックのほうに向き直った。「ある意味、オーエンが怒るのはたぶん健康な証拠。彼とて怒りをすべて封じ込めることはできない。」

向こうの壁際で、イアントが不平そうにうなった。

トシはデスクの前に座ったまま、ぼくのほうを見た。「あなたの行動を二日に渡って追跡してみた。昨夜何かあったでしょう？」

コントロールを保とうとしながら、ぼくはうなずいた。また飢えが込み上げてくる。でもここにいる人たちは、ぼくを助けようとしてくれているんだ。「光ったんです・・・家に戻る途中で・・・雷みたいだった。」

トシはうなずき、ジャックとグエンに向き直った。「わたしが発見した事実と合致します。昨夜、ポールがバレット通りを歩いているちょうどそのとき、小さいものですが、裂け目の発生が記録されています。」

「彼はさらわれたって意味？」グエンはぴよんと立ち上がった。「さらわれて、また戻ってきたってこと？」

トシは首を振った。「そうは思えない。裂け目エネルギーの巻きひげが彼と結びついたのだと思う。とても小さくて、ほとんど何でもないものよ。でも、彼を変えつつある。」

突然、オーエンがぼくの後ろに立っていた。「それから、トシと平行でテストを行ってみました。ポールのDNAは・・・ミューテーションしてます。裂け目のエネルギーが体の中に入り込み、彼を何かに変えています。」

ジャックが立ち上がり、オーエンのそばに行った。ほんの間近で、彼のパワーを嗅ぎとると涙が出てきた。おいしそうな匂いだった。

「しかし、おれも裂け目のエネルギーに当たったことはある。みんな多少なりと受けて

いるのに。なぜポールだけ変わってしまったんだ？」

オーエンとジャックはトシのほうを見たが、彼女は首を振った。「わからない。わかっていることは、裂け目が人をさらうことがあるし、流れ着いてくる物もあるってこと。」彼女は顔をしかめた。「ジャック、わたしたちは裂け目がどのような作用をするのか、基本的なことがわかっているに過ぎない。ポールは運の悪い時に運の悪い場所にいただけ。」

ぼくは彼らが何の話をしているのかさっぱりわからなかった。この裂け目というのが何なのか知らなかった。わかっていることは、餓えてるってこと。食べなきゃ。ぼくは目を閉じて、再び音を閉めだそうとした。しかし、そのとき、オーエンの声が聞こえた。彼の声は静かだった。暗かった。恐ろしかった。

「おれの方では彼を救えない。」

怒りと飢えとがぼくの中で集まって噴き出した。彼らの汗と罪悪感と苦痛とを嗅ぎとることができた。トシの憐みの心、グエンの同情心、イアントの恐怖を嗅ぎとることができた。ぼくらがいる場所がどこであれ、多くの匂いを嗅ぎとることができた。死と人間でないものまでも。モンスターも悪魔も性の欲望もコーヒーだって。でも何にもましてあふれていたのは、ジャックが持つパワー。そいつに圧倒され、息が詰まりそうだった。

食べなければ。

食べて飢えを止めないと。

ぼくは激怒で絶叫し、腕の拘束器具を引きちぎり、ジャックに襲い掛かり、彼の首筋に歯を食い込ませ、その味といったらもう・・・命そのもの！怒りで興奮状態になり、彼の皮膚を噛み砕き、笑った。彼の甲高い悲鳴で、ぼくの頭の中は苦痛でいっぱいになったが、餓えは留まるどころを知らず、彼は獲物だった。彼の手がぼくを殴り、押しやった。彼は激痛に絶叫し、両手は自身の血にまみれていた。ぼくは床に倒れ、再び次の攻撃をする態勢に入ったとき、後ろ頭に銃を突きつけられるのを感じた。

オーエンが叫んだ。「やめろ！イアント、撃つな！」

ぼくはアメリカ人の滴る血と喉から垂れ下がる肉片を見つめ、ジャンプするべく、身をかがめたが、音も無くオーエンが彼の前に立ちふさがった。ぼくは止まった。止まって、首をかしげた。彼を見上げた。ぼくは餓えていたのに、動けなかった。

グエンとトシがジャックに駆け寄り、止血しようとしている。ぼくには、ただオーエンがゆっくりとぼくのほうに歩いて来るのが見えるだけだ。彼はぼくの肩にそっと手を置いた。ぼくは咆えた。

「すまない。」彼の声は悲しそうだった。「ぼくとおいで。」

「どうしてぼくが？」ぼくはたずねた。「なぜこんなことがぼくの身に？」

オーエンは首を振った。「わからない。きみの細胞は一定の速度で変わり続けている。君が感じている飢えは、決して止まらない。」

ぼくは拘束器具に逆らうのを止めた。深呼吸しようとした。ぼくはクリスマスや朝食や仕事

のことを考えた。ママやパパや妹のヘレンのことを考えた。

「君のメタボリズムは非常に活発だ。冷凍睡眠処理も効かない。打つ手がない。」

ぼくはギャビン&ステイシーやニルヴァーナやフライドエッグやビールや飢えのことを考えた。再び飢えが襲いかかってくる・・・襲いかかって・・・襲い・・・

「いった通り、」オーエンは続けた。「君次第だ。ぼくらがみんなを救う唯一の方法は、君の死しかない。信じてほしい。どれだけクソなことをいってるのかわかっているから。君が他の者のことなんか気にすることもできない状況なものもわかっているが、方法はこれしかない。」

「ぼく、死ななければ。」自分がいってるのが聞こえる。ぼくの声なのかもしれないけど、もうぼくは認識できなかった。

オーエンはうなずいた。「どちらでも、われわれがやるか・・・わかるな・・・」彼は銃を撃つ仕草をした。「それとも、自分で選ぶか。ここにぼくと一緒に居れば、飢えがますますひどくなるが、止まるだろう。飢えが止まれば、君は死ぬ。」

「痛いかな？」目に涙があふれ、ぼくはたずねた。

彼は首を振った。「君のメタボリズムは活発だから・・・速いだろう。でも・・・」

突然、彼はぼくの腕の拘束器具を動物のようにひっかいた。彼がぼくの肩をつかみ、検死台からぼくを引き起こす間、ぼくはぼかんと彼を見つめていた。ぼくは白いタイルの部屋を見渡した。ぼくと彼だけだった。ぼくは餓えていたが、彼は死人だった。

「何をしてるの？」彼がぼくを立たせようと助けてくれている間に、たずねた。

「君はモンスターじゃない。君は人間だ。ひどい行為を受けるのはおかしい。死ぬ時は、尊厳を守られてしかるべきだ。」

ぼくは感謝し、うなずいた。飢えの苦悶の感覚が再び近づいてきたので、戻ってくるのを待つ間、すすり泣いた。でも、戻ってこなかった。これが最後なんだ。これがぼくの死なんだ。

ぼくは息を求めて喘ぎ、涙が頬を流れ落ちた。彼はぼくの両手を握り、引き寄せるとハグした。彼の冷たい腕がぼくをしっかりと抱いた。だんだん暗くなっていく。

「ありがとう・・・」ぼくはなんとか息をすった。もう一度最後にと目を開き、見上げた。階段の一番上に、検死室の出入り口に女性が、トシが立っていた。彼女はぼくらを見下ろし、泣いていた。彼女の涙の香りがした。ぼくは彼女に微笑もうとしたが、うまくいったかどうか分からない。

そして、すべてが暗闇に包まれていく中、神様がいてくれたらなあって祈った。

訳注

※1：バーナビー警部：原題 *Midsomer Murders*。イギリス ITV で1997年から放送されている刑事ドラマ。日本ではNHK-BSで放送された。

※2：ザ・ワイヤー：原題 *The Wire*。アメリカ HBO で2002年～2008年に放送された犯罪ドラマ。日本ではSuperDramaTVで放送された。

※3：ギャビン&ステイシー：原題 *Gavin and Stacey*。イギリス BBC で2007年～2009年に放送されたシットコム。

Notice 2009/11/28

このドキュメントは、Kubo Sachie が個人の楽しみとして作成したものです。

元の著作物の著作権を侵害する意図はありません。

また、日本語作成時の誤訳・文章脱落等は十二分にあります。訳の正確さを保証するものではありません。英語ではなく、日本語で読んで楽しんでもらえたら、と思います。

なお、物語の中の出来事、人物はすべて架空であり、現実との類似は偶然です。(あつたら怖いかも・・・)

参考：使用した原文の出典

TORCHWOOD THE OFFICIAL MAGAZINE YEARBOOK

Published by Titan Books

First edition August 2008

'Monster' by Joseph Lidster

ISBN-13: 978-1845769369